平成 28 年度地域づくり海外調査研究事業調査報告書

伝統文化と自然環境を生かした学校教育

～インドネシアの事例から～

調査地 :インドネシア　バリ島　ウブド村

調査日 : 平成 28 年 9 月 21 日、24 日

平成 29 年 2 月

一般社団法人　移住・交流推進機構

成清　雅人

目次

１．はじめに

２．高梁市の現状と課題

３．インドネシアの教育

４．視察事例

５．高梁市での取組

６．まとめ

１．はじめに

全国各地で少子高齢化と人口減少が進んでいく中、多くの自治体にとって定住対策は大きな課題になっている。住みやすい街づくりや生き残りをかけ、助成制度を中心とした施策が推進されている。

私の出向元でもある高梁市は、平成 23 年に移住定住を推進する「市民定住係」を設置し、さらに平成 24 年には定住相談のワンストップ窓口として「定住対策課」を設置し、行政はもとより市内事業所などと連携して、定住施策を推進している。

しかしながら、平成 23 年には、転入者が転出者を 44 名上回る社会増があったが、ここ数年では、転出が上回る傾向が続いている。

一方で、人口の減少に伴い教育を取り巻く環境も大きく変わっている。

児童生徒数は平成 20 年と 28 年の比較で小学校では 173 人、中学校においても 62 人と減少している。特に山間部での教育施設の統廃合が進んでおり、小学校では 20 校から 15 校に減少している。

	平成 20 年		平成 28 年		比較	
	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校
学校数	20	7	15	7	△5	0
児童･生徒数	1,431	738	1,258	676	△173	△62
人口	37,372		31,578		△5,794	

図１　小・中学校数と児童生徒数の状況

２．高梁市の現状と課題

（１）教育の状況

高梁市では、平成 27 年 3 月に「高梁市新総合計画後期基本計画」が策定されたことを機に、これまで進めてきた取組の成果と課題を踏まえ、高梁の地域性や独自性を持たせながら本市の教育が進むべき方向を明らかにし、推進のための計画を市民へ示すことを目的として、「第２次高梁市教育振興基本計画」を策定している。この計画では、高梁市教育大綱に掲げた「大志を抱き未来を拓く人づくり」を基本目標に、生きる力を育み、目標に向かって夢と志をもち、ふるさとに愛着と誇りをもつことができる人づくりをめざし、５年間の計画期間に様々な施策を展開していくこととしている。

これらの施策は、学校教育、家庭や地域社会の教育、スポーツや、それぞれの地域の特色ある文化芸術活動の活性化など、高梁の豊かな自然や歴史文化など地域資源を生かし、学校・家庭・地域が連携・協力することで、地域全体の教育力の向上へと取り組むものである。

（２）海外研修にあたっての視察先の選定

学校教育は、基礎的な学習だけでなく、自然環境に由来する地域の文化や歴史、伝統を学ぶ機会でもあると考えており、地域環境を生かした学校のあり方について考察したいと考える。高梁市は廃校による校舎の活用も課題となっている。廃校舎は主に中山間地域にあることから、言い換えれば自然など都会にはない地理条件もあり、そうしたフィールド

を生かした教育活動を展開することが可能である。
　上記のことに着眼し以下のとおり視察先を選定した。
　インドネシア国　バリ島　ウブド第３小学校
　　〃　　グリーンスクール

３．インドネシアの教育

　インドネシア共和国は、東南アジアの南部に位置する世界最多の島しょ国家であり、ジャワ島やスマトラ島、バリ島などの主要な島のほか、中規模な群島を含めた約 13,000 の島から成り立っている。人口が約 2 億 5,000 万人のインドネシアは、ジャワ人、スンダ人、バタッ人など大多数がマレー系住民で、その他には中国系やパプア系などが居住している。
　約 490 の民族集団がそれぞれ多様な民族文化を継承しており、言語も約 250 種を上回るが、1945 年の憲法において国語を「インドネシア語」に統一し、小学校の段階からインドネシア語教育を実施している。そのため、公用語はインドネシア語だが、国内各地ではジャワ語やバリ語など独自の言葉も使われている。

ウブド村内

　バリ島は、インドネシア共和国バリ州に属する島であり、地理的にはインドネシアのほぼ中心に位置している。島の人口は約 390 万人でそのうち約 95%がヒンドゥー教である。観光地としても有名なバリ島が独自の雰囲気を醸し出しているのは、インドネシアで唯一のヒンドゥー教の島であるためと言われている。人々の生活は、伝統的なスタイルを維持し、毎日神々を敬うことを忘れていない。

（１）インドネシアとの日本の教育環境の比較

　インドネシアの教育は基本的には国家教育省が一括管理している。
　義務教育は小学校 6 年間と中学校 3 年間だが、就学率 95.71%の小学校に対し、中学校は首都のジャカルタ特別州、大都市周辺では同レベルとなっているものの、地方ではまだその域には達していない。
　政府は 2008 年までに中学校までを完全義務化する計画であったが、現実には日本のような完全な義務教育制度化にまでは至っていない。ジャカルタ特別州は義務教育を現行の 9 年から高校を含めた 12 年に延長するとともに、公立高校の授業料の無料化を段階的に導入

し、2015 年度中の完全実施を目指していたが、現時点ではまだ達成していない。

公立学校は、小学校が Sekolah Dasar、中学校が Sekolah Menengah Pertama、高等学校が Sekolah Menengah Atas と呼ばれる。小学校では一般的な教科を学習するが、中学校では技術や工業、農業などの実技の習得が多くなる。学習言語はインドネシア語だが、第 2 言語として 33 州の各地の言語と英語も学ぶ。

インドネシアと日本の教育システムの違い

	インドネシア	日本
学校制度	6・3・3・4 制	6・3・3・4 制
義務教育期間	7 歳～15 歳 （小学 1 年生～中学 3 年生）	7 歳～15 歳 （小学 1 年生～中学 3 年生）
学校年度	7 月第 3 週～翌年 6 月第 1 週	4 月～3 月
学期制	【2 学期制】 1 学期：7 月～12 月 2 学期：1 月～6 月	【3 学期制】 1 学期：4 月～7 月 2 学期：9 月～12 月 3 学期：1 月～3 月
教育概要 特色	小学校では一般的な教科を学習するが、中学校では技術や工業、農業などの実技の習得が多くなる。学習言語はインドネシア語だが、第 2 言語として 33 州の各地の言語と英語も学ぶ。	小学校では国語、社会、算数、理科、生活、音楽、図画工作、家庭、体育の他、教科以外の教育活動として道徳、総合的な学習の時間がある。中学校では保健体育、技術・家庭、外国語が加わる。

＜＜インドネシアの教育理念＞＞

パンチャシラ（インドネシアの国是とする 5 原則：神への信仰・民族主義・民主主義・人道主義・社会正義）の教育が小学校から行われ、そのほかに Pramuka（ボーイスカウトに近い組織）と称して小学校の低学年からしつけや人間関係について学びながら学校外で活動することがある。

４．視察事例

（１）インドネシアの公立小学校

＜視察先：ウブド第３小学校＞

今回訪問した小学校は、1976 年にウブド村内で３番目に開設された国立の小学校であり、全校児童数は 363 人で、2 年生が最も多い 73 人となっている。

この学校の授業は、朝 7 時 30 分から午後 12 時 40 分までの 8 時限で行われている。日本のような学校給食のシステムは取られておらず、帰宅して各々の家庭で昼食を摂る。

通学は集団登校ではなく、家庭の責任で行われている。

子供たちの様子（休憩時間）

インドネシアの小学校では、１校あたり最低でも 9 名の教師の配置が義務付けられている。この小学校では、教師は 20 人配置されており、その多くが地域の住民である。教科は、インドネシア語、数学、体育、英語、エクストラ（カリキュラム以外の授業）、科学、物理学、文化（踊り・音楽）、宗教から構成されており、そのうち、インドネシア語、宗教、体育以外は学年ごとで全て一人の教師が教えている。一方で宗教の授業は、生徒により信仰する宗教が異なり、教える内容が広範囲に及ぶため州政府に任せている。基本的にはヒンドゥー教以外の生徒は他の学校の生徒と集められ、別の場所で授業を行っている。

＜特徴的な授業「エクストラ」＞

ウブド村はバリ有数の観光地であり、バリ舞踊やバリ絵画などの芸術の村として知られている。中心部の通りにはびっしりと軒を連ねた「ウブド市場」があり、雑貨や衣料品、お土産などが売られている。すぐ近くには野生猿の保護区である「モンキーフォレスト」もあり多くの観光客が訪れる人気のスポットとなっている。

授業の様子（エクストラ）

また、自然環境も豊富でテガラランの棚田など、古い町並みと農業文化が共生している。

エクストラは、学習プログラム以外の授業で各学校が独自の授業を行うことができ、地域にあったカリキュラムを組むことが出来る。この小学校では、ウブド村の特性を生かしたバリの踊り（民族舞踊）を学んでいる。子供たちはアルバイトが許されており、週末はバリ舞踊の公演などで地域の観光に貢献している。また、ウブド村のように、バリ島内のなかでも観光が盛んな村では、英語を中心とした授業に力を入れている。

（２）インドネシアの自然環境

＜視察先：世界遺産　テガララン棚田（ウブド村）＞

テガララン村を流れるプクリサン川流域のスバック（棚田）の景観は、2014 年にユネスコにより世界遺産に登録されている。

テガララン村は、ウブド村から約 10 キロメートルにある山間の村である。バリ島の農業の中心は稲作であり島の至るところに水田が存在する。

プクリサン川流域のスバックエリアは、水を司る王立寺院のタマン・アユン寺院などを含む、5 つの棚田地域で構成された景観である。

テガララン棚田

これらは、バリで 9 世紀から継承されてきた、灌漑用水を管理して分け合う社会共同体の

水利システム「スバック」を象徴するものある。スバックは、2000 年以上前にバリとインドの文化的な交流の中で生まれた、神と人、人と人、人と自然の調和を重んじる哲学である「トリ・ヒタ・カラナ」の概念を反映している。

スバックに基づく民主的で平等な農耕手法が、現在も多くの実りを稲作農家にもたらしている点で大変貴重な存在である。

この棚田には多くの観光客が訪れ、対岸にはテガラランの棚田が一望できるライステラスがある。食事を提供しているほか、カフェや雑貨など店舗があり、人気の観光スポットになっている。

ライステラスからは景観を一望できる

（３）インドネシアのインターナショナルスクール　グリーンスクール

＜視察先：グリーンスクール＞

バリ島の主要都市デンパサルから約 30 分のジャングルの中に、奇跡の学校とも言われる「グリーンスクール」がある。世界中から多くの子供たちが集まるバリ島のインターナショナルスクールである。

幼児から高校生まで約 400 人が在籍しており、その国籍は、カナダ・アメリカ・日本・台湾・インドネシア・オーストラリアなど、非常に多岐にわたる。

グリーンスクールの校門

このグリーンスクールは、カナダ生まれの起業家「ジョン・ハーディ氏」が 2008 年に設立した学校である。

ジョン・ハーディ氏は 25 歳の時にインドネシアのバリ島に移住し、1975 年にジュエリービジネスを立ち上げ、世界的企業に成長させた。ハーディ氏は、2006 年にアメリカで公開された映画「不都合な真実」に衝撃を受け、「映画の内容が確かならば、これからの子供たちは自身が送ったような素晴らしい人生を送ることができない。子供たちの可能性を広げるために自分たちができることはなんでもする。」とバリ島への恩返しを決めた。

この地域が地球に優しい世界を提唱し、その世界の実現に向けて教育とデザインの分野から貢献するために、世界で通用する高度な学科教育と、建築・菜園・アート・環境教育とを融合させた独創的なカリキュラムを構築しており、そのカリキュラムが評価され世界中から多くの生徒が集まっている。

①環境負荷を抑える取り組み

グリーンスクールは、自然に富んだアユン川沿いに 10 万平方メートルのキャンパスが広がっており、教室や多目的ホールのほか、運動場やコミュニティキッチンなどを備えている。

これだけ広大なキャンパスを作るにあたっては、環境負荷の抑制が重要となってくる。グリーンスクールは、「自然と人との共生」を理念として掲げており、最大の特徴としては、「竹」を使って建築物を整備していることがあげられる。

グリーンスクール内では、教室や机、椅子などが全て「竹」を使って制作されている。ハーディ氏らがグリーンスクールを設立した後に立ち上げた、自然と共生する空間づくりを目指すデザインチーム「IBUKU」では、この竹を使うメリットをこう述べている。

・アジアにおいて竹は、恵み、強さ、柔軟性、持久力、長寿を象徴する神聖なものとみなされている。

・竹は強く、同じ重さの鉄や鉛よりも強度がある。

・竹は 3 年程度で建築資材として使用可能になるほどの成長速度を有している。

竹で作られた建物

こうしたメリットから、バリに多く生育している竹材を環境に負荷をかけることなく利用し、かつ栽培から加工、利用までを地域内で完結することで、持続可能な循環が生まれている。

そして、グリーンスクールでは電力や飲み水、食べ物などをスクール内で自給するエコロジー活動への取組を進めている。

グリーンスクール内で使用される電力は、全てが自給自足となっており、太陽光パネルによる発電で約 80%、残りの 20%は小規模水力発電やバイオマスによって生み出されてい

る。また、飲料水はろ過システムを導入し確保しており、グリーンスクール内で排出される食品廃棄物やし尿は堆肥化され、菜園などへ還元されている。

グリーンスクール全体図

②グリーンスクールのカリキュラム

グリーンスクールには、3 歳から 18 歳までの子供が暮らしており、年代に応じたプログラムを提供している。

3 歳から 6 歳までのプログラムでは、竹でできた教室とリサイクルされた素材で子供の自然な好奇心を呼び起こし、歌、ダンス、芸術、ストーリー・ティーチング、文化的祝賀会、ヨガ・マインドフルネス、自然への畏敬の念を抱くキャンパス周辺のツアーを通して学ぶ楽しさを喚起し、身体的、社会的、情緒的、言語的、認知的、創造的、文化的な発達を促進するものとなっている。

7 歳から 11 歳までは、フィールドワークを通じて、冒険の追求、情熱の追求を促すものとなっている。また、授業では起業家の考え方や、環境教育、実践的スキル、芸術について学び、リーダーやフォロワー、人と人をつなぐコミュニケーターなど、様々な役割を経験する機会を与え、リスクにも果敢に挑戦する人材となるような教育が展開されている。

エンタープライズエデュケーション
ものづくり、遊び方の発見、動物とのふれあいや環境保全活動を年２～３回行う

体育
運動の楽しさ、身体的スキルと能力を身に付ける

12 歳から 14 歳までの中学校のプログラムは、基礎学習に加え、芸術や音楽、語学学習などのコースを選択することができる。15 歳から 18 歳までの高校生向けのプログラムは、NPO や起業、事業を立ち上げる授業もある。社会に貢献する活動を通して、世界の大学で羽ばたける人材づくりを目指している。

③地域へ学びの場を提供するアフタースクールプログラム

グリーンスクールでは、地域の学校にグリーンスクールでの学びの場を提供しており、地元の村の学校から 300 人の学生が参加し、語学とグリーンスクールの持続可能な環境づくりについて学んでいる。また、インドネシアにおいて次世代の指導者になるための教育支援として、インドネシアの学生に対しグリーンスクールに参加するための資金を提供している。

そして、教育者養成コースとしては、地元の学校や教育プログラムに持続可能性をもたらすためのツールとスキルを、インドネシアの教師に提供している。

５．高梁市での取組

私の派遣元の高梁市でも、特色のある学校づくり事業として、各学校が地域の歴史や文化生活を学校授業に取り入れる学習を行っており、地域の住民を講師として招き、子供たちにその地域特有の伝統文化や環境を生かした授業を展開している。

特色のある学校づくり事業の一例

学校	カリキュラム	内容
高梁小学校	社会科歴史学習指導	戦争体験の話を聞いた
	備中松山踊り指導	松山踊りの指導を受けた
巨瀬小学校	音楽・篠笛	篠笛の指導を受けた
中井小学校	国語科・読み聞かせ	中井地域に伝わる話を聞いた
	備中松山踊り指導	松山踊りの指導を受けた
	山田方谷学習	校内の資料を見て回りながら学習した
宇治小学校	ブッポウソウ観察	巣箱設置や観察を行った
	ピオーネ学習	地域の農園でピオーネの栽培を学んだ
松原小学校	道徳学習	I ターン者を講師に夢に向かって努力することを学んだ
有漢東小学校	ピオーネ学習	地域の農園でピオーネの栽培を学んだ
	古墳学習	高田古墳について学んだ
川上小学校	図画工作	まんが・イラストの指導を受けた
	川上音頭	川上音頭の踊り指導を受けた
富家小学校	ピオーネ学習	地域の農園でピオーネの栽培を学んだ
	ボルダリング	ボルダリングの指導を受けた
備中中学校	体験活動	フリークライミングの指導を受けた
宇治高校	地域の歴史学習	宇治の歴史を学んだ
	宇治の魅力発見	地域おこし協力隊を講師に宇治の魅力を学んだ

＜高梁小学校「備中松山踊り指導」＞

高梁小学校では、県下三大踊りである「備中松山踊り」を授業で学んでいる。この備中松山踊りは毎年 8 月 14 日から 3 日間、備中高梁駅前大通りで開催され、期間中は十数万人の踊り一色に染まり、その規模は県下一を誇る。歴史は古く、江戸時代慶安元年（1648）、備中松山藩主水谷勝隆（みずのやかつたか）の時代に、五穀の豊穣と町家の繁栄を祈って踊ったのが始まりと言われている。町衆から始まった「地踊り」と、武家に伝わった「仕組踊り」があり、現在では「地踊り」が中心に踊られている。

授業のなかでは、地域住民で構成する「松山踊音頭保存会」が中心となって、音頭取りや太鼓の打ち方、地踊りの演目「松山踊り」「ヤトサ踊り」を学んでいる。地踊りは、備中松山踊り開催日はもとより、運動会のアトラクションなどでも披露しており、生活のなかに溶け込んでいる伝統継承の一例であり、後継者の育成も図っている。

６．まとめ

ウブド第３小学校は、公立の小学校で義務教育制度のもと授業が行われている。そして特別授業（エクストラ）を通して、幼少期から地域の伝統文化や産業などに深く関わることで、地域をよく知ること、そして伝統文化を受け継ぐ体制を構築していることをみることができる。テガラランの棚田のように、9 世紀から脈々と続いた伝統が現在の農業、そして観光へと繋がっているのも、地域資源を活かした営みとしてみてとれる。

一方で、グリーンスクールでは、「自然と人との共生」を理念とした環境への負荷を最小限にする取組を推進するとともに、子供たちが世界で通用する学科教育と建築・菜園・アート・環境教育とを融合することで、世界各国の多くの人々が共感するグローバル人材の育成を目指している。私学でありながら、設立者がバリ島の自然環境に感謝し、地元の村の小学生に環境を通じての学びの場を提供し、なおかつ次世代を担う子供たちや教育者、インドネシアの教師に対しても学びの場を提供しており、グリーンスクールが地域に開かれた教育環境であることがわかった。

高梁市での特色のある学校づくり事業は、市内全ての市立学校で行われており、授業内容は学校に任されている。この特色のある学校づくりでは、その地域内で抱えている課題や、後世に伝えたい伝統文化、中山間地域ならではの自然環境をフィールドとした体験学習を取り入れており、地域住民が関わることで、地域住民と子供たちの双方に地域の課題

意識や考える力、そして地域への愛着心を生むという効果をもたらしている。また、元々の地域住民だけではなく、Ｉターン者などの外部人材（地域おこし協力隊）からの話も、子供たちや地域にとって、地域の魅力の再発見に繋がっている。

視察を通して、学校は地域の拠点として重要なものだと改めて感じることができた。児童生徒数の減少により学校の統廃合が進んだ地域では、地域の伝統や文化の継承がさらに難しくなることが考えられる。

やむなく廃校となってしまった学校の再開は難しいが、伝統文化や自然環境、地域特性など、地域のことが深く学べる学校（地域学校）として、子供の学びだけではなく、地域の大人たちと一緒に学べる環境づくりが、これからは必要だと感じた。地域に根ざした学びの拠点として廃校舎の活用も一つの手法となるだろう。